

## 第6回北杜市立小中学校適正規模等審議会 会議録

1. 会議名：第6回北杜市立小中学校適正規模等審議会
2. 日時：令和3年3月26日（金）午前10時00分～11時45分
3. 場所：北杜市役所3階大会議室
4. 出席者：  
（委員）清水一彦・川村めぐみ・日永龍彦・清水永一・坂本利訓・丸茂 浩・小石 博・輿石長時・坂本美樹・細川英雄・高木ひとみ  
  
（事務局）堀内教育長・中山教育部長・堀内教育総務課長・田中指導監・天池総務担当リーダー・安部施設担当リーダー・白倉学校教育担当リーダー・総務担当柳澤
5. 議事  
（1）小中学校適正規模等の検討に係るワークショップの概要と検討の参考資料等について（資料①～⑤）  
（2）令和3年度スケジュールについて（資料①、⑥）
6. 公開・非公開の別：公開
7. 傍聴人の数：2人
8. 議事録署名委員：細川委員、高木委員

### 議 題

- （1）小中学校適正規模等の検討に係るワークショップの概要と検討の参考資料について  
（会 長） それでは事務局に説明を求める。  
  
（事務局） （事務局より資料を用いて説明）  
  
（会 長） ただ今、事務局より資料の説明があったが、前回からの大きな変更点は、ワーキンググループの検討結果の反映と一枚物の全体の流れが分かる資料ということだった。意見、質問を求める。  
  
（委 員） 12月の審議会での意見をもとに、ワーキンググループでの意見を反映したものなので、本日出席された委員が納得いただける資料であれば、わかりやすい資料になっていると思う。

- (委員) 資料4概要版について、最後の文章に、「持続可能」という表現が使われているが、ここでいう「持続可能」とは財政的に無理がないという意味でよろしいか。「持続可能」というのは、近年、SDGsの文脈でよく使われるようになっており、広義の意味を持つ言葉として定着してきているので、「持続可能」という表現が、財政的な意味に限定されるのであれば、表現を直した方がよいのではないか。
- (事務局) 財政的な面に強く捉えられるかもしれないが、資料1のP7「持続可能な学校運営」については、ヒト（教員配置）・モノ（校舎）・カネ（教育費）などの様々な面からの「持続可能」という意味で表現をしている。
- (委員) ヒト・モノ・カネの前に、「教育水準の維持・向上」という教育の内容そのものが、「持続可能」という表現に非常に関わってくる。そこが誤解されると、「持続可能」という言葉に誘導されてしまう。必ずしも「持続可能」と言い切れない部分があるので、ワークショップの際には考慮していただきたい。
- (会長) 意味を誤解される場合もあるので、工夫が必要である。
- (事務局) ワークショップでは、意味の解説を丁寧に行いながら誤解のないように進めたい。
- (委員) 資料1のP15の教員負担の増大のところで、分掌数は減るとあるのは、教員一人あたりの担当する分掌数が減るということでよろしいか。
- (事務局) そのとおりである。「教員一人あたり」を追記する。
- (委員) 今年度は、資料が充実したことがよかった。来年度は、具体的な検討をしていければ良いと思う。  
※複数の委員から、同じ趣旨の発言。
- (委員) 来年度はワークショップが各地区で開催されるが、現実味のある結果になるように前進していただきたい。

- (委員) 北杜市が将来に向けて、どういう教育をしていきたいのか、どういったまちづくりをしていくのかをはっきりさせて、北杜市らしい、芯の通った教育の方針を掲げて、特徴的な教育をつかっていければ良いと思う。
- (会長) コロナ禍の中で、やまなしグリーン・ゾーン認証等、様々なモデルが出てきている。北杜市モデルと言えるような学校づくりをしていきたいというのは、審議会の共通認識なのではないか。どういう内容をどのように学ぶのか、県では 25 人学級が予算化され、国では令和の日本型教育について、デジタル化や、学校の小規模化への対応等の視点からも議論されている。国の新しい方向性について、委員より説明していただけないか。
- (委員) 重要なのは、「個別最適化した学びをいかに保証していくか」ということである。集団の中で競い合いながら学ぶということも必要だが、GIGA スクール構想が進み、ICT 端末が 1 人 1 台配備されるようになると、個々のニーズに合った学びをいかに保証していくかが重要になるといわれている。ワークショップ資料にある垂直統合の意義は、異年齢集団の中で様々な学びをそれぞれの子どもがしていくというところにあると考えている。北杜市においては、このような集団での学びと ICT を使った個別最適な学びの両面を、北杜市全体で実現できればと思う。
- (会長) 個別最適な学びというのは、国の議論でも重要なキーワードとなっている。コロナ禍でよく言われたのは、交流とコミュニケーションの不足だった。お互いに学びあえる雰囲気づくりは、小中学生の成長にとっても非常に重要であり、このような視点から適正規模を考える必要もある。
- (委員) ワークショップ資料には、ヒト・モノ・カネの詳細な資料になっているが、北杜市はどういう教育をするのか、目指すのかについては語られていない。今までは集団化・画一的な教育が行われてきたが、文科省においても個別化・多様化していくという方向性は示されている。教育の方向性について、ワークショップで一般の人に深く議論してもらうのは難しい。そこは、審議会において一定の方向性を出していかないといけない。よっ

て、ワークショップでは、実情を知っていただき、いくつかの可能性を示しながら、地域の方々がどのように考えるかという議論をしていただき、それを踏まえて、教育の内容について、来年度の審議会で議論していく必要がある。

(会 長) 資料1のP30にある「北杜市の原っぱ教育ランドデザイン」が重要になってくるので、ワークショップ参加者にも説明してもらえればと思う。

(委 員) 保護者にとって関心が高いのは課外活動、つまり部活動である。課外活動について、教育委員会と社会教育との連携をどうするのか。また、子どもが地域社会の中でどんな人材になってほしいのか、といった視点も重要であり、今後詰めていってほしいと思う。

(会 長) 部活動については、審議会の中でも適正規模とは切り離してという言葉もあったが、今後の子どもの成長のための適正配置であれば、部活動を入れても良いと思う。

(会 長) 他にご意見はあるか。  
一部修正があったが、審議会としては、この資料を了承したいと思う。

(2) 来年度のスケジュールについて

(会 長) それでは事務局に説明を求める。

(事務局) (事務局より資料を用いて説明)

(会 長) 今のスケジュールについてご意見・ご希望はあるか。

(委 員) 小中学校の児童生徒へのヒアリングで各学校4～5名というのは、どんな児童生徒を対象に考えているか。また、児童生徒への事前説明はどうするのか。

- (事務局) ヒアリングについては、小学校・中学校の校長先生にも方法を相談して検討した。事務局では当初、ワークショップ資料を説明して意見をもらうことも考えていたが、小学生は資料の理解が難しいのではという意見があった。  
今回のヒアリングは、子どもたちが学んでいる教育環境と異なる教育環境を想像して答えてもらう必要がある。アンケートということも考えたが、今後の審議に活かさない浅い意見を収集しても意味がないため、デプスインタビューという、子どもたちが感じていることを探り出していくような方法を採用したいと考えている。  
方法の都合で対象人数は、各校4～5人程度となる。各学校で選んでもらうことになるが、これまで校長先生と話す中では、生徒会・児童会の正副会長や役員の子といったアイデアも出ている。事務局としては、それに限らず、参加したい子には参加してもらいたいと考えている。集まり方や時間は各学校長と相談しながら考える。
- (委員) 4～5月は新学期で落ち着かない時期であるので心配した。須玉小学校、長坂小学校ではグループワークを進めていて、SDGsについてのグループワークをやっているのので、グループインタビューで話すのは慣れているのではないかと思った。
- (委員) 小中学生へのヒアリングでは、自分たちの学校の良い所や、変えていきたい所など、子供達から見た学校の現状について意見を聞きたい。
- (事務局) 自分たちの学校の良い所や、変えていきたい所などについて、子ども達から聞き取りを行いたい。
- (会長) ヒアリングの対象や環境によって、答えが変わる可能性があるのので、学校長と相談しながら周到な準備をお願いします。
- (委員) 一昨年、高根で小学校が統合されたので、ヒアリングではその感想を聞くと良いと思う。地区から集まった時に良かった面、悪かった面が子どもたちの声として聴けると思う。

- (委員) 長坂は複数の小学校が集まって統合したが、小淵沢は小学校から中学校にそのまま上がっており、意見の違いが出るので、その意見を比較することも重要ではないか。
- (委員) 部活、通学については、教育委員会と社会教育、公共交通を管轄する部署などとの横の連携が必要なので、説明をして協力を得るべきである。
- (委員) 保護者の意見を聞く機会はあるか。
- (事務局) 保護者は、来年度のワークショップに参加してもらい、意見を聞く。審議の過程でより保護者の意見を聞く必要が出れば、対象を広げて意見を聞くことも考えられる。
- (委員) 中学生は、1つの小学校から進学する地域と、2つの小学校から進学する地域があり、友達との関わり方や通学、部活などに差が出てくると思うので、非常に興味深い点である。
- (委員) ワークショップをすると、北杜市は教育において何を指すのかという質問が必ず出ることが予想されるが、それに関しては審議会で議論していないので答えられない。5月のワークショップでの質問を受けて6月の審議会で方向性を決めないと次のワークショップで答えを返せない。6月の審議会で、審議会としての考えをどう表明するかを検討することが非常に重要だ。十分な議論を重ねながら、教育の方向性について考えを整理していく必要がある。その際、ワーキンググループはたたき台をつくる役割を担うようになるのではないか。審議会がどう発信していくかで、以降のワークショップの意見交換の内容も変わるし、答申にも影響する。
- (委員) 白州は子どもの人数が20人以下になってしまう状況であり、人数の多い所の子たちとは考えが違おうと思う。一方で、子どもたちは順応性があるので、変化にも対応できるところがある。コロナ禍をチャンスと捉えて、北杜市の教育をいい方向に変えていくことを考えたい。

- (会 長) 今まで出た意見を参考にして、事務局の方で実施内容を検討してほしい。スケジュールは基本的には了承ということで、進めていければと思う。その他なにかあるか。
- (事務局) 市内にも小学校において水平統合した事例がある。過去のアンケート結果など、残っているものもあるので、整理して報告する。北杜市の教育のあり方については、来年度に新たな総合計画を策定するため、審議会からもご意見をいただきたいと思う。
- (事務局) 社会教育、公共交通を管轄する部署などとの横の連携が必要との意見があったが、新年度から地域と学校のあり方を社会教育委員による調査研究の重点事項とすることになっている。
- (会 長) 以上で議事を終了する。

終了